

ゴーシラ物語¹⁾

——『ボーディサットヴァ・アヴァダーナ・カルパラター』第35章和訳——

引田弘道・大羽恵美

あらすじ

()は掲の番号

布施者の手助けをする功德 (1)

カウシャーンビーのウダヤナ王はスダナ長者の財の多さを褒める。(2-6)

スダナ長者は個人の財よりも王の人徳の方が大切だと反論する。(7-10)

王は長者に大臣になるよう依頼するがスダナは拒否。(11-18)

とうとう根負けして大臣に任命されたものの、スダナは常にダルマを守る。(18-23)

大臣の職を解かれたスダナは布施行に精を出す。(24-25)

南路からやって来て、のどが渇いた聖者たちに木の精が水瓶をもった手を出して水を与える。(26-31)

樹神の前世譚 (その1) (32-34)

聖者たちは別の樹神に食物を求める。(35-38)

樹神の前世譚 (その2) (39-44)

聖者たちは布薩を完成するためにスダナの家に行く。さらにスダナと一緒にアナータピンダダの許へ行く。(45-49)

彼らは世尊の許に行く。世尊の恩恵により聖者たちは善趣にいたり、スダナは智慧の器とされる。(50-52)

スダナは世尊のためにカウシャーンビーに僧院を建立。比丘のチュンダがスダナの協力者となる。(53-54)

世尊は召使のラーダーからぼろ布を受納される。(55-56)

スダナの前世譚, ゴーシラ物語。(57-65)

対応する文献

『ボーディサットヴァ・アヴァダーナ・カルパラター』(=BAK) の、この物語に全般的に対応する文献は、

① 『根本説一切有部毘奈耶』(大正23, 882a-883c)²⁾

② Dhammapadaṭṭhakathā (1, 203-208)³⁾.

また、最後のゴーシラ物語に対応するものとして⁴⁾,

③ 『賢愚経』散檀寧品(大正4, 386a-387a)

④ Divyāvadāna(= Divya), p. 462.⁵⁾

このうち、『毘奈耶』はBAKとまったく一致しているかと言うと、そうではない。例えばBAKの樹神の2つの前世譚は『毘奈耶』では一つにまとめられており、しかも前者は「布薩を全うしなかった」とあるのに対し、後者では「八支戒を受持した」と正反対となっている。反対に「布薩を全うしなかつ

た」ことは DhA (1. 205–206) に認められる。ここではアナータピンディカの使用人が布薩の日だと知らないまま森で仕事をして帰ると食事が用意してあったが、それを食べずに寝てしまい、極度の疲労と空腹から死んで、半分の布薩行 (upad̄dha-uposatha-kamma) をした功德によって、この樹の精霊としての力を得たとある。⁶⁾

次に世尊がラーダーという名の召使いからぼろぼろの衣を受納され、彼女が「私はもう召使いにはならないように。」という誓願をたてたところ、その衣が世尊と同じ色になったという話は『毘奈耶』には認められない。

さらに、大准陀が妙音と共に橋閃毘に言って寺を造ったという話の後、『毘奈耶』は7種の有事福業と無事福業を列挙するが、これは BAK には認められない。

いっぽう、ゴーシラ前世の物語は『毘奈耶』ばかりではなく、『賢愚経』や Divya にも説かれており、かなり有名なものであることが分かる。これに関しては、森2009, 161 (4)(5) のほか、山口2016が詳細に1フレーズごとの対応表を作成しているので参照されたい。ただ BAK では蔵の番人の名前としてパドマーカラ、さらに食事の時間を告げる者として、ダルマドゥータという固有名詞を挙げるが、どちらの漢訳にも、Divya にも両名の名前はなく、職種だけというのが大きな違いである。

以上から、BAK は根本説一切有部に近い内容を持ちつつも、いくつかの点で大きな相違も認められることから、カシュミールの有部に近い部派に語り伝えられていた可能性が指摘できよう。

参考文献

『賢愚経』散檀寧品 (大正4, 386a–387a).

『根本説一切有部毘奈耶』 (=『毘奈耶』, 大正23, 882a–883c).

Dhammapadatt̄hakathā (= DhA). *The Commentary on the Dhammapada*. Ed. H. C. Norman, PTS. 1970 (1. 205–206).

Dīvyāvadānam. Ed. P. L. Vaidya. Buddhist Sanskrit Series, 20, Darbhanga: The Mithila Institute, 1959.

Apte, V. S. 1986. *The Practical Sanskrit-English Dictionary*. Revised and Enlarged Edition, Kyoto.

Burlingame, E. W. (1921) 1979. *Buddhist Legends. Translated from the Original Pali Text of the Dhammapada Commentary*. Harvard Oriental Series, 28. London, PTS.

Yamaguchi, Nariko. 2016. “Tales of Householder Ghosita, a Man Who was a Dog Once Before: The *Udenavattu* and Parallel Stories in Northern Buddhism”, *Journal of Indian and Buddhist Studies*, 64–3, 1178–84.

袴谷憲昭. 1996. 「悪業払拭の儀式関連経典雑考(VI)」『駒沢短期大学研究紀要』24, 67–91.

平岡 聡. 2007. 『ブッダが謎解く三世の物語』上・下, 大蔵出版.

森 章司・本澤綱夫. 2009. 「コーサンビーの仏教」『中央学術研究所紀要』モノグラフ編, 14, 147–258.

山口周子. 2015. 「ゴーシラ長者前世譚—Udena Vatthu 〈ウデーナ王物語〉より—」『印度民俗研究』14, 3–19.

和 訳

施者の手助けの功德

一瞬でも布施の手助けの立場となる (dānasahāyatām) 者は施者と同等の果報を得る。

他者への奉仕や愛情に精進する者の中で、功德のない行動をする者は、相談相手の立場 (sacivatvam) にはならないものだ。(1)⁷⁾

ウダヤナ王、スダナ長者の財の多さを褒める

以前、世尊である勝者が、シュラーヴァステイーにある (Śrāvastīyāṃ) 美しいジェータ林の (Jeta-kāṇane), アナータピンダダ園の精舎を (Anāthapiṇḍada-ārāma-vihāra-) 楽しんでおられたとき⁸⁾, (2)⁹⁾

カウシャーンビーに (Kauśāmbīyāṃ), ウダヤナ (Udayana, Tib: 'car byed) という名前のヴァトサ国

(Vatsa) の王がいた。

今でも持明者の (vidyādhara-) 妻たちは彼の名誉を¹⁰歌い讃えている。(3)

彼の領土に、多くの仕事で生計を立て、

富を集めることに (dhanādhāna-)¹¹長けていたスダナ (Sudhana, Tib: Nor bzang) という名前の長者が (grhasthah) いた。(4)

ある時、その長者が (王の) 命令によって、謁見の場に (āsthāne) 用向きのためやって来たのを知ると、王は尊敬の念をこめて、(彼に) 言った。(5)

「長者よ、私は (そなたの) 黄金の満ちたような声を (hiranyopacitasvaram)¹²知っている。

そなたは蓄え方を知っているから、多くの黄金の蔵を所有しているのか。」¹³(6)

スダナ長者、個人の財よりも王の人徳の方が大切だと反論

王が笑ってこのように尋ねると、彼は合掌して彼 (の王) に答えた。

「王様、確かに私の家には黄金の蓄えがあります。(7)

善き行いへの思いを楽しみ、親愛の情で心が柔らかくなった神がいて、

父であるあなたという守護者がいれば、この人民にとって他に何の不足がありませんか。(8)

もし王様が肉の匂いを嗅いで残虐になり (-āghrāṇa-nirghrṇah), 虎の状態に (vyāghratām) なれば、

金持ちは (dhanino) 貧者の状態に (adhanatām) なり、貧者は (adhanāḥ) 死に (nidhanam) 至ります¹⁴。(9)

ダルマという財が王様にあれば、恐れがない人によって財が蓄えられ、蓄えられたものは分配され、分配されたものは人々によって享受されるのは明らかです。」(10)

王、長者に大臣になるよう依頼

賢明な彼の適切な言葉を聞いて、

王は齒の輝きによって (daśanodyotaiḥ, Tib: so yi 'od kyi) 恩恵を (prasādam) 示すかの如く彼に言った。(11)

「賢明なそなたに私の大臣になってほしい。

最も賢いそなたのような者によってこそ、大地という重荷は担われるものだ。」(12)

スダナの拒絶

このような王の言葉を聞いてスダナは彼 (の王) に言った。

「我どもは王様にお仕えする (rājasevāsu) 集会を飾る¹⁵賢者にはなりません。(13)

といいますのも、人々への奉仕というものは、自分の意のままになる方へ向かうことを (svācchandya-udyāna-) 断ち切り、ぐっすり眠る幸せを売って (vikrayah),

輪廻の苦しみや憂鬱や恐怖を買う (-karaḥ)¹⁶ようなようなものだからです。(14)

主君らによって頭に足を乗せられると、踏み台が為すべきことを為し終えた状態となるように、

私はいつまでもそのような奉仕者 (sevako) のままでおります。(15)

奉仕の努力や苦勞によって (-āyāsa-prayāsenā) 繁栄が得られたとしても、

(それを) 享受することは裏切り者と交際しているようなもので、為政者のしかめ眉をさらに曲げるものです。(16)

これらの王の繁栄は努力して手に入れたとしてもじっと留まっていないものです。

ひどい傲慢さによっては捉えにくく、悪病のように制御しがたいものです¹⁷。(17)

権勢というものは (vibhūtayah) 一瞬に結合したかとおもえば、すぐに別離するのを¹⁸喜びたがるものです。

売春婦のようにどうしようもないくらい快いものです¹⁹⁾。」(18)

大臣に任命されたスダナ、常にダルマを守る

と言って拒んだものの、彼は王によって大臣に (sacivah) された。
 支配者の望みを一体誰がやり過ぐことができようか。(19)
 (スダナは) 王によって高い地位につき、全てを管理する状態にされたが²⁰⁾、
 憎しみに損なわれたすべての大臣たちは彼に我慢できな²¹⁾。 (20)
 悪意ある (大臣たち) にそそのかされた王によって、(彼に) ダルマがあるか験そうとして、
 (不正を働きやすい職に) 何度となく任命されたが、不正な事を (asatkāryam) 全くしなかった。(21)
 見当違いの怒りを持った王は (彼を) 刑罰に追いやりようとしたが²²⁾、
 それにもかかわらず、彼は非ダルマ (adharmā-) と結びついた命令を考えもしなかった²³⁾。(22)
 「一回の生の喜びのためだけに、何百という他の生を傷つけるような²⁴⁾、
 聖者に非難される行いを私はいたしません。」と彼は言った。²⁵⁾(23)

大臣の職を解かれたスダナ、布施行に精を出す

恐怖やダルマへの誘惑によって (-upadhā-)²⁶⁾(スダナは) 清浄なままであり、彼は王によって解放されると、
 絶え間のない布施という供養を (dānasatram)²⁷⁾全ての乞食たちに行った。(24)
 誉れ高い彼の布施の供養が (dānasatre) あらゆる場所で知られるようになると、
 如意樹への (kalpavṛkṣa-) 人々の関心はとても低く (param pratanutām) なった。(25)

樹神、聖者たちに水を与える

その間、聖者の集団が水場を (tīrtha-) 求めて南路から (dakṣiṇāpathāt)²⁸⁾、
 苦しい難所にやって来ると²⁹⁾、人気のない森に入った。(26)
 そして、皆が喉の渇きに苦しんで、気を失って、褥に横たわった。
 気が動転して、心の働きのないものにさえも大声で水を求めた。(27)
 「神やガンダルヴァやナーガのうち、誰か憐愍の情が海の (ようにあふれんばかりの) 者が (dayāmbudhiḥ)
 ここにいれば、
 我々に水を与えよ。」³⁰⁾と彼らは言った。(28)
 すると、宝石の腕輪にある鈴の心地よい音を鳴らしながら (ratnakeyūra-kaṇṭakāṇṭaka-saddhvanīḥ)、
 手に黄金の水瓶を持った (bhujastha-hemabhṛṅgāras) 彼 (の樹神) が木の中から出てきた。³¹⁾(29)
 蓮華のような手で下に向けたその (水瓶) から、彼らは甘露の味のする水を、
 喉の奥まで飲むと、生気を取り戻して喜んだ。³²⁾(30)
 出立したが³³⁾、再びやって来ると、彼らは驚いて尋ねた。
 「目に見えないような木の住処から現れ出た³⁴⁾あなたは誰か。」と。³⁵⁾(31)

樹から出た手の前世譚 (その1)

(樹から出た手である) 彼は言った。「シュラーヴァスティーに誉れ高く (viśruta-yaśāḥ)」、富の蔵でもある³⁶⁾、
 アナータピンダダという名前の、一切施者である長者が (grhādhipah) いました。(32)
 私は衣服の仕立て屋 (saucikena)³⁷⁾で、以前彼の家の近くに住んでいたので、

腕を挙げて、常に乞食たちに彼の家を示しました。(33)

その功德によって、神の状態を得て、私はここに住んでいるのです。

私のこの右 (dakṣiṇaḥ) 腕は輝き、乞食者に好ましいものと (-dakṣiṇaḥ)³⁸⁾なっているのです³⁹⁾。(34)

聖者たち、樹神に食物を求める

彼に別れの挨拶をして (āmantrya)、彼ら聖者たちは再び森に出立した。

彼らは空腹になり、好ましく、立派な陰のある (snigdha-sacchāyam) 最高の樹を見た。(35)

彼らはまた先と同じように、彼 (の樹神) に食物を大声で求めた。

(人を) 驚かせるような深い声が (vāṇī) 沸き起こった。(36)

「この蓮池の岸にある桶の中に⁴⁰⁾天上の食べ物のような食物が (divyānnaḥojanam) 一杯入っています。

そこに行って好きなだけお食べなさい。」(37)

このように彼によって指示された天上の食物を (divyabhojanam) 食べた後、彼らは

神聖な樹木に住んでいる彼 (の樹神) に、「汝は誰か。」と尋ねた。(38)

樹神の前世譚 (その2)

彼 (樹神) は語った。「シュラーヴァステイーにアナータピンダダ長者がいます。

私は彼 (アナータピンダダ) がサンガに食事を布施する時の (saṃgha-bhojane)⁴¹⁾バラモンでした。(39)

私は給仕に巧みであったので⁴²⁾、酸乳の壺を配る係 (dadhikumbha-pracāraḥ) でした。

その食事の布施が終わりに近づいた時、ほんの僅かの食べ物が (私に) 残っていました (svalpa-śeṣānna-bhojanaḥ)。(40)

私は比丘たちの、尊敬され高貴で⁴³⁾、王のような食事と (rājabhojanam)、

自分の塩気のないまずい (akṣāram) 食事とを見比べてみじめな気持ちに (khinna-mānasaḥ) になりました。(41)

アナータピンダダの忠告によって、食物に対する尊敬の気持ちから、

私は八肢からなる布薩の誓いを (aṣṭāṅgayuktaṃ ... poṣadhaṃ vratam)⁴⁴⁾立てました。(42)

ただ、誓いを全うしないまま、私は夜に渴望から食べてしまいました。

それゆえに私は世間で「布薩を全うしない者」(あるいは固有名詞の「カンダポーシャダ」
Khaṇḍapoṣadha, Tib: gSo sbyong nyams pa) として知られています。⁴⁵⁾(43)

私は誓願を破りましたが、天子の状態となりました。」

という彼の言葉を聞いて聖者たちは驚いた。(44)

聖者たち、スダナとアナータピンダダの許へ行く

彼らは歩きながら考えた。「我々は長い間の厳しい修業でつらい思いをしただけであった。(それでもなお) 今でも善を体得していない。(45)

今、布薩を完成するための戒律に我々は専念しよう。

不滅の幸福の手立てであり、自らの利益 (となる布薩) に誰が敬意を払わないだろうか。」⁴⁶⁾(46)

このように考えながら彼らはカウシャーンビーの近くに行った。

有名なスダナ長者の (grhamedhinaḥ) 家に (grham)⁴⁷⁾到着した。(47)

そこで彼 (のスダナ) によって賓客の礼を受けると (krta-ātithyā)、彼にその奇跡 (の話) をし、

アナータピンダダに会うために他ならぬ彼 (のスダナ) と一緒に行った⁴⁸⁾。(48)

彼らはシュラーヴァステイーに到着し、彼 (のアナータピンダダ) によって恭しく供養されると、

(聖者たちは) 彼 (のアナータピンダダ) に見たこと、聞いたことの全てを話した。⁴⁹⁾(49)

世尊、彼らに恩恵を与えられる

戒を求める人たちすべてと、彼の友人のスダナを、
ダルマを友とする彼（のアナータピンダダ）は喜んで世尊の近くに連れて行った。(50)
世尊も彼（のアナータピンダダ）の言葉から彼らに恩恵を（anugraham）与えられた。
世尊によって真理を見て覚醒した（satyadarśana-saṃbuddhā）彼らは善趣（Skt: sugatim, Tib: bder bgrod）
に到った。(51)
彼らが行ってしまうと、世尊はスダナを慈愛で潤んだ視線で（pakṣapāta-ārdayā drśā）
見て、彼（スダナ）を正しく智慧の器に（Skt: jñānabhājanam, Tib: yang dag ye shes ldan par mdzad）し
た。⁵⁰⁾(52)

スダナ、世尊のためにカウシャーンピーに僧院を建立、チュンダ僧院の名の由来

彼（スダナ）は真理を見ることで（satyadarśana）素晴らしい善の発揚を（kuśala-udaya）得た。⁵¹⁾
彼は出立すると、カウシャーンピーに勝者のために僧院を（vihāram）建立させた。⁵²⁾(53)
世尊によって命じられた比丘のチュンダと呼ばれる者が彼（スダナ）の手助けの状態と（sahāyatām）
なったので⁵³⁾、
それゆえにそこは⁵⁴⁾「チュンダヴィハーラの土地」となった。(54)

世尊、ラーダーからぼろ布を受納される

その時、ラーダーという（Rādhā, Tib: mGu byed）⁵⁵⁾名の召使いは（dāsī）その僧院の世話係り（vihāra-
paricārikā）であった。⁵⁶⁾
世尊は、慈悲によって彼女のぼろぼろの衣を（śrīṇavastram）受納された。(55)
「私はもう召使いにはならないように。」と⁵⁷⁾、信仰心を伴った誓願を（śraddhā-praṇidhāna-）彼女が捧
げると、
その衣は（caro）世尊と同じ色になった。(56)

スダナの前世譚、ゴーシラ物語

スダナの煌く稀有な功德の積み重ねを（puṇya-saṃbhāram）見た後、
比丘たちによって尋ねられると、世尊は彼の前世の出生を（pūrvodayam）話された。(57)
スンダーナという（Sundhāna, Tib: gZugs byed）名の長者が（grhapatir）⁵⁸⁾、以前ヴァーラーナシーに
（Vārāṇasyām）⁵⁹⁾いた。
気高き象のような彼には布施の中断が（dānapariṣayaḥ）なかった。(58)
十二年間干ばつに悩まされた時に⁶⁰⁾、彼には、
絶え間なく食べ物を求める人々のために、妨げられることのない供養が⁶¹⁾あった。(59)
彼の家にはパドマーカラという（Padmākara, Tib: Padma'i byung gnas）名の蔵の番人が（koṣāgāra-patir,
Tib: mdzod khang bdag）いた。
彼は布施の手助けを（dāna-sahāyakaṃ）した。まことに、成功には手助けが（sahasthā）いるものだ。⁶²⁾(60)
独覚のサンガに（pratyekabuddha-saṃghasya）、食事の時間を告げる者で（bhaktakāla-nivedakaḥ）、
ダルマドゥータ（Dharmadūta, Tib: Chos kyi pho nya、法の使者）と呼ばれる賢い助言者が（mantrī）彼の
近くにいた。⁶³⁾(61)
ある時、彼が義務を忘れたことにより、時間が過ぎると、

その時に、犬が彼らの前で時間を告げた (kāla-samjñām)。(62)

そのスダンナーが他ならぬ現在の私であって、蔵の番人がアナータピンダダである。

サンガのダルマドゥータこそがウダヤナ王である。(63)

時の合図を (samjñā-) ⁶⁴⁾ 告げた犬がスダナである。⁶⁵⁾

(スダナは) 美声の点で (ghoṣilena) 王に知られているので⁶⁶⁾、ゴーシラ (Ghoṣila, Tib: gDangs can, 美音) という別名を持っている。(64)

(輪廻の) 生を断ち切る世尊によって語られた、以上の良き人たちに⁶⁷⁾ 相応しい行為を、

—— (それは) 善行の芳香の精髓である甘露の味わいがあるが——比丘たちは、聴聞のための合掌をして⁶⁸⁾ 飲み込んだ。(65)⁶⁹⁾

作例解析

1. 『ボーディサットヴァ・アヴァダーナ・カルバラター』の絵画セットについて

これまでにチベットにおける『ボーディサットヴァ・アヴァダーナ・カルバラター』の複数の絵画セットについて明らかにしてきた。すでに発表した翻訳と各物語に該当する作例解析にも述べたが、チベットで最も流布しているテーマの絵画セットであるのにも関わらず、先行研究は「ナルタンのタンカ」と「シトウのタンカ」が中心で、41幅からなるタンカセットの研究はほぼ皆無であった(絵画セットの概要については表を参照)。41幅からなるタンカセット(以下、「41幅のタンカ」)の調査は現在も継続中であるが、これまでの成果として述べるなら、管見に及ぶ限りでは、四つの完全なセットが現存することが分かった。

本稿で提示した「ゴーシラ物語」が表されるタンカは「41幅のタンカ」の「右14」、つまり、中央のタンカの右側の14番目に配列されるタンカである。このタンカには第34章「ナンダ・ウパナダ龍王の物語」(章番号はチベット訳に従う)、第35章「スダッタ長者の物語」、第36章「ゴーシラの物語」の三話が表される。このうち、最初の二話の作例解析はすでに発表してあり、本稿では「ゴーシラの物語」の解析を行う。これでこのタンカに表される全ての絵図について同定したことになるので、比較のために「41幅のタンカ」の異なるセットについて「右14」のタンカを一覧に示すと、図版の1から4になる(表と図版を参照)。

表1 チベットのタンカセット一覧

タンカセットの名称	概要	現存するセット(完本)所蔵 (現在発表されているセットのみ) 図は本稿の図版番号
「41幅のタンカ」	<ul style="list-style-type: none"> ・41幅からなる ・「ナルタンのタンカ」と様式的に類似する ・ドライラマ5世が41幅のタンカを制作したことがありと文献に記されるが関連は不明(1671年完成) 	<ul style="list-style-type: none"> ・雍和宮(1745年完成)所蔵 万福閣展示(図1) ・雍和宮(1745年完成)所蔵(図2) ・北京・故宮博物院所蔵(図3) ・ダラムサラ(1730-40年完成)所蔵(図4)
「ナルタンのタンカ」	<ul style="list-style-type: none"> ・ナルタンで開版された31幅のタンカ ・18世紀後半に成立 ・Tucciによって発表される 	<ul style="list-style-type: none"> ・北京・故宮博物院所蔵(図5) ・チベットハウス(デリー)所蔵(図6)
「シトウのタンカ」	<ul style="list-style-type: none"> ・シトウ・パンチェン・チューキ・ジュンネー(1700-1774)の指揮のもと作成 ・23幅からなる。1737年完成 ・パドマ・チューベルの著作に挿絵として発表される 	(断片的に各地に所蔵される) 一例として(図7)

ここに示す図1から図4は全て「41幅のタンカ」のうちの一冊で、説話を表す部分はほとんど複写されたように同じである。いずれのタンカもタンカ左部分の上半分と、中央の釈迦牟尼の上と右上に「ナンダ・ウパナンダ龍王の物語」、タンカの右側の上部を除くほとんどに「スダッタ長者の物語」、タンカ左部分の下半分と釈迦牟尼の下に「ゴーシラの物語」を表す。

図1は、中国の北京市内にある雍和宮が所蔵するタンカで、現在は万福閣に展示してある作品である。裏書の銘文から1745年に完成したことが分かっており、ダライラマから雍和宮に送られた、いわば由緒正しい作品である。保存状態は非常に良く、一定の技術を持った絵師たちによる作品であることが、着色とグラデーションの美しさやなめらかな描線、細部まで丁寧に描きこまれたモチーフなどにも容易に見て取れる。金色か黄色で銘文が描き込まれていることもこのタンカの正統的な由来を表している。

図2は、雍和宮所蔵のタンカで、保存状態が良好ではなく、ところどころで変色が見られ、またおそらく巻かれて保管されたと見られる、よれとしわが残っている。銘文はない。図1と全く同じ構成で、ほぼ複写に近いが、雲の描き方や樹木の色などが異なる箇所もある。写真で見ると、良い出来栄で、チベットでよく行われている、経験の浅い絵師が絵画作成の修習のために描くタンカであるとは想定できない。しかし、銘文が描き込まれていないため、図1とは様相が異なっている。

図3は北京の故宮博物院所蔵の、鮮やかな着色が目目を引くタンカ⁷⁰である。タンカセット中の一部背面に「乾隆四八年八月」と銘があるので、西暦1783年に完成したと考えられる。銘文はない。これらの図1から3は物語のシーンと中尊に至るまでほとんど同じように描かれている。

図4はインドのグラムサラに所蔵されるタンカで、物語のシーンを示す箇所はほとんど上記の図1から3までと変わらないが、最も大きな違いは、中央の仏とその上に表される尊格である。図1から3の中尊は釈迦牟尼で蓮華座の上に坐す像である。身色は通常の肌色で、金の模様が施された赤の衲衣を身に付ける。いっぽうの図4の中央の仏は仏形で身色が赤で表される。中尊の上に描かれる像も重要で、図1から3はゲルク派の祖師の像を描くのに対して、図4は身色が赤で宝冠や胸飾、腕輪などで装飾された無量寿 (Tshe dpag med) の座像を表す。

この中尊とその上の祖師、あるいは尊格の違いはおそらくタンカ作成を指揮した施主の違いによると考えられる。この点については「41幅のタンカ」と「ナルタンのタンカ」に共通するが、セット中の最後のタンカの右隅にポラネーという世俗の人物が描かれるセットと仏教の尊格である梵天が描かれるセットの二系統がある。梵天が表される系統では中尊の上に祖師が描かれ、ポラネーが表される系統は施主がポラネーであることを示し、中尊の上に無量寿を表す。

「41幅のタンカ」によく似たタンカセットが「ナルタンのタンカ」で、このタンカセットについては作例が非常に多く存在する。完本のセットで現在美術館や博物館などの所蔵のセットで知られているのは、北京の故宮博物院所蔵のタンカセット(図5)と、インドのニューデリーにあるチベットハウス所蔵のタンカセット(図6)である。故宮のタンカとチベットハウスのタンカの両方とも、中尊は釈迦牟尼で中尊の上には雲が描かれるだけで、尊格や祖師を描かない。いずれも最後のタンカはポラネーを表す。

「41幅のタンカ」や「ナルタンのタンカ」とは全く異なる系統のタンカが「シトゥのタンカ」(図7)である。構図や様式が全く異なり、互いに相互関係は認められない。

2. ゴーシラの物語の絵図解析

2.1 「41幅のタンカ」における同定

「41幅のタンカ」の中尊の下に「ゴーシラの物語」が描かれる(図1から4)。図8(図4の部分図)の中央の王宮の場面はウダヤナ王がスダナを呼んで大臣に任命するシーンである。その左隣の棟の中にスダナが坐すシーンがあり、これはスダナが悪事を嫌う場面である。右にある建物を囲う塀から男性が

出ていくのは、スダナが大臣から解放される場面である。王宮のシーンの下に乞食者が杖をついて歩く姿があり (図9中央下にも同じ箇所を示す)、その中に指を指す男性が描かれている。この箇所に銘文はないが、この男性はかつて仕立屋でアナータピンダダの家の近くに住み、乞食に彼の家を指示していたとされる人物であろう。図9 (図1の部分図) 左を見ると、その男性の指の先に樹木があり、そこから水瓶を持つ白い片腕が出ており、その下に水を受ける五人の苦行者の姿たちが描かれる。その左上では、苦行者たちは食べ物も得て坐している。そして連れ立ってアナータピンダダの家に向かう (図8王宮の右上)。その右の釈迦が坐す場面はアナータピンダダとスダナが釈尊に面会するシーンである。それに続いて、中央の王宮の左上は釈迦がアナータピンダダとスダナに恩恵を与える場面である。その右上に一人の女性が釈尊に布を差し出す場面を描くが、これがラーダーの布の布施を表す。図8では右下隅のスダナの解放の横の部分にドリン (rdo ring) と呼ばれる石碑を模した図形があり、その中には「第36章ゴーシラの物語」と書きこまれている。

2.2 「シトゥのタンカ」の絵図解析

次に「シトゥのタンカ」を見ると、タンカの中央よりやや下あたりに「ゴーシラの物語」が描かれている (図7)。「シトゥのタンカ」には物語の内容を表す銘文がなく、章数と題名が描かれるのみになり、絵図から判断するよりほか手だてがない。図10は図7の中央から下部分を拡大した部分図になるが、この図の中央に三棟の建物があり、その中央の建物の中に王らしき人物と男性が座って表される。王と見られる人物は男性に指を指しているため、おそらくこれはスダナが大臣に任命されたシーンであろうと考えられる。中央の左のやや下に樹木が描かれ、その周りに聖者のグループが表される。左側に描かれる樹木の下には神と見られる人物が立っており、手に水瓶を持っている。その前の聖者たちの一人は、水瓶を逆さにして水を飲んでいるため、このシーンは聖者が樹木に住む神から水を得たシーンであると考えられる。その右側に描かれる樹木の中から樹木に住む神が半身を出しており、その下に聖者の一人が立っている。その真下の水辺で聖者たちが座り込んで器に入った食べ物を食べている。これは聖者たちが、かつてバラモンであった樹木の神から食物を得たシーンであろう。中央に戻り、三棟ある建物のうち左の建物の中に男性一人に聖者たちが話をする場面が描かれる。これは聖者たちがスダナにこれまでの経緯を全て話す場面であろう。三棟の建物の下に山があり、左斜面に描かれる聖者たちはスダナを連れ立ってアナータピンダダの家に向かう。図10右端中ほどの建物のなかにはスダナと聖者がアナータピンダダに面会するシーンが描かれ、さらにその左上には彼らが世尊を訪ねて出かけるシーンが描かれる。その上には建物の中に世尊と面会する聖者とスダナ、アナータピンダダが描かれている。最後に、画面中央の三棟ある建物の右の建物の中に中央に世尊と、左側に布を差し出す女性像、右側に僧と在家の人物が一人ずつ描かれる。これはラーダーによる布の布施を表すシーンであろう。

3. まとめ

「41幅のタンカ」セットの作例をまとめ、「ゴーシラの物語」が表されるタンカを横断的に示した。これによって、それぞれのセットの特徴が見られた。さらなる調査と研究が必要ではあるが、これまでに調査してきた資料からは、「41幅のタンカ」セットには施主の違いによって異なる二つの系統があるということが分かった。物語を表す部分はどちらも似通っているため、いずれかが原本になるか、あるいは共通の原本があったことが推測される。「ナルタン」のタンカ」セットはおそらく「41幅のタンカ」を複製したセットであろうと考えている。こちらも原本になるタンカセットがあったはずである。木版画の作例が知られているので、それとの関係も明らかにしなければならない。

「41幅のタンカ」および「シトゥのタンカ」の作例における場面同定を行った。どちらのタンカも文

献に忠実に絵画化してあり、同定できない絵図や、文献の記述と著しく異なるシーンはなかった。



図2 「41幅のタンカ」
(蔵訳第34章から第36章を表すタンカ) 雍和宮所蔵



図1 「41幅のタンカ」
(蔵訳第34章から第36章を表すタンカ) 雍和宮万福閣

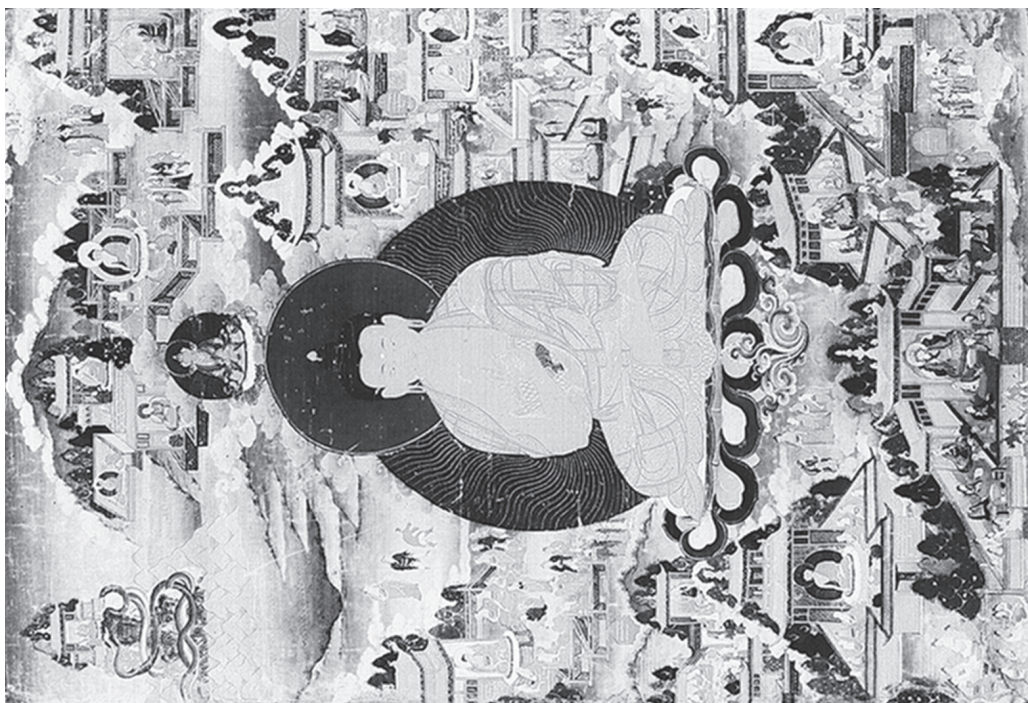


図4 「41幅のタンカ」右14
インド・ダラムサムラナムギャルカカン所蔵

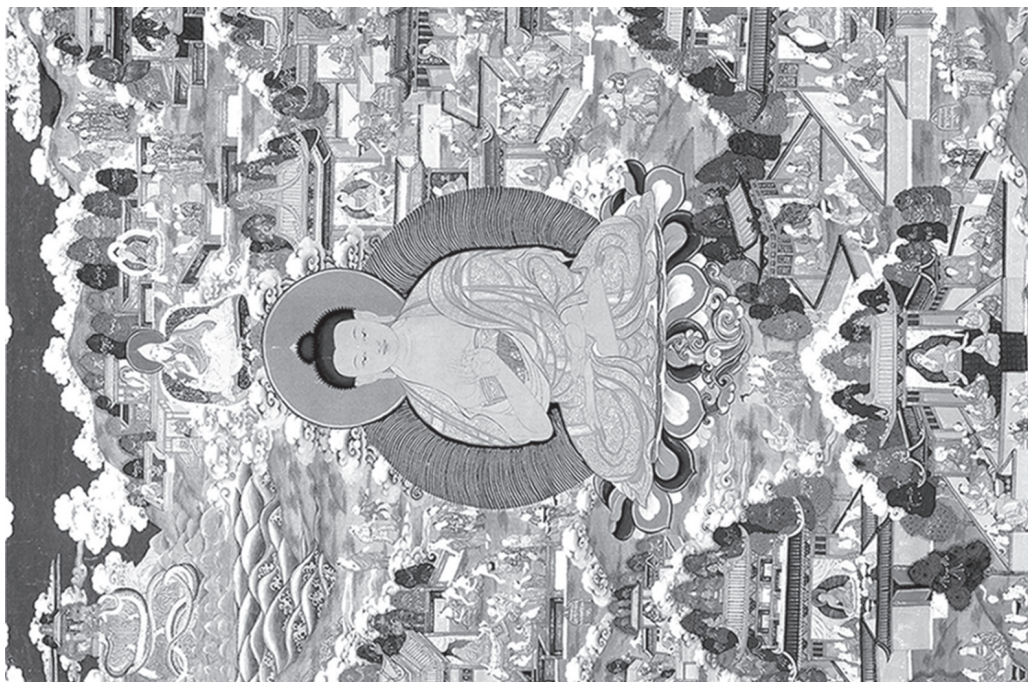


図3 「41幅のタンカ」No. 15
北京・故宮博物院所蔵

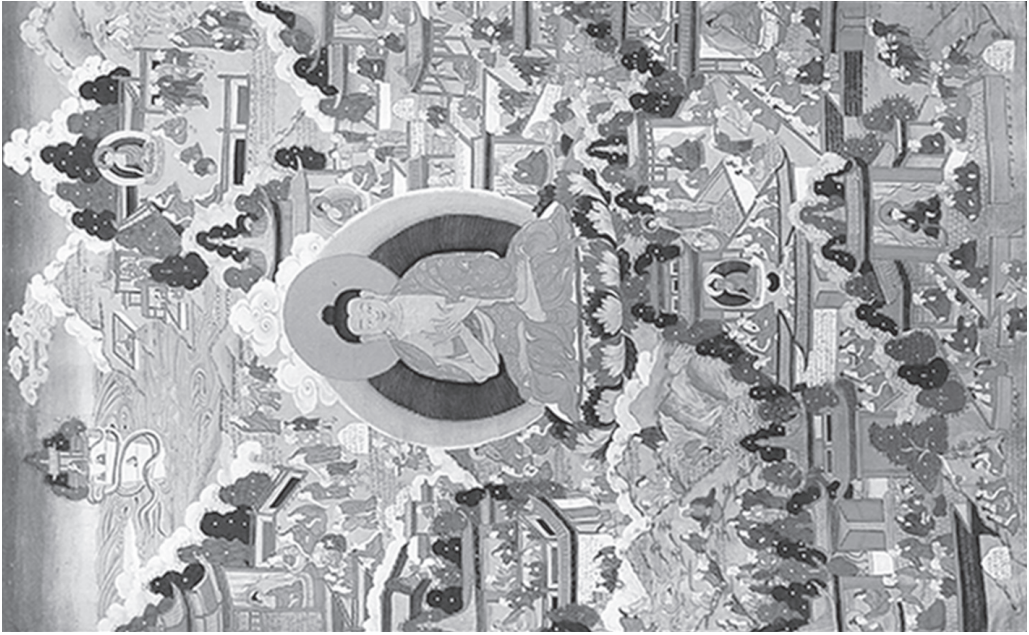


図6 「ナルタンのタンカ」右II
チベットハウス（ニューデリー）所蔵



図5 「ナルタンのタンカ」
北京・故宮博物院所蔵

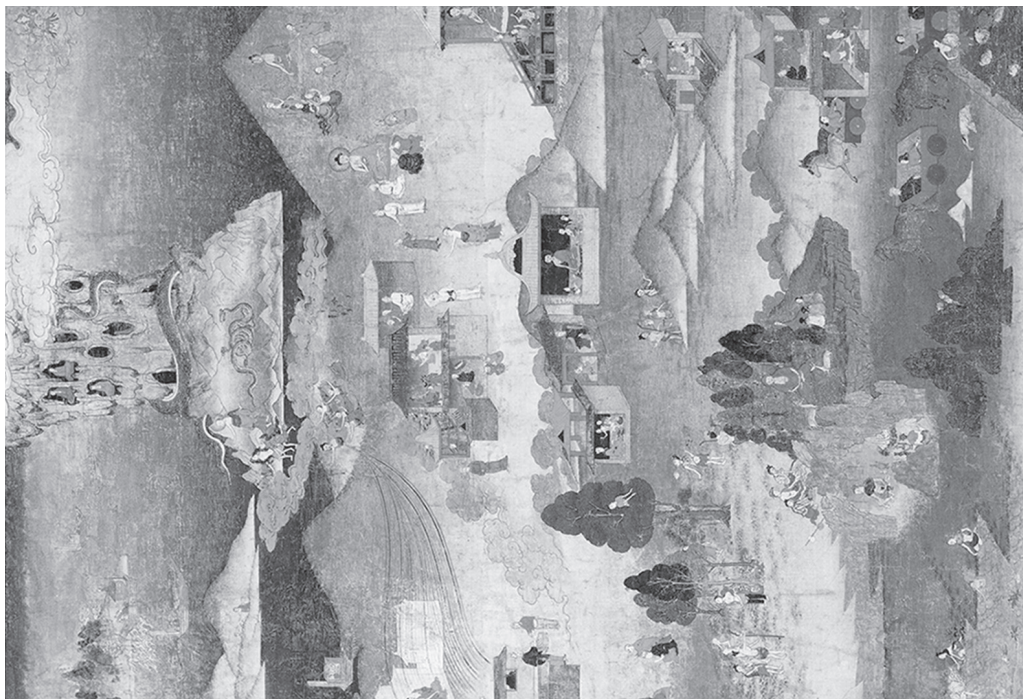


図7 「シトウのタンカ」のうち一幅



図8 図4下部拡大図「ゴーシラの物語」



図9 図1下部拡大図「ゴースラの物語」



図10 図7中央部拡大図「ゴースラの物語」

注

- 1) サンスクリットで *Ghoṣila*, パーリで *Ghosita*。ただパーリのアッタカタールでは, *Ghosita* と *Ghosaka* の 2 様で出る。両者はもともと別人なのか, 後者は前者の variation なのか検討を要する。森 2009, 167–168。あるいは父から家督を継ぐまでは *Ghosaka* と呼ばれ, その後は *Ghosita* となる。Yamaguchi 2016, 1182 (3)。
- 2) 森 2009, 163 (10)。
- 3) 苦行者と木の精との物語から対応する。
- 4) Yamaguchi 2016 は, この物語の関連する文献と対応する平行句を列挙している。
- 5) まったく対応する訳ではない。早魃と独覺布施の箇所のみ。
- 6) DhA, 1. 206, ll. 6–8 (*taṃ nissāya katassa upaḍḍhūposathakammaṃ nissandena eṣā sampattī mayā laddhā.*) その他この物語全体については, Burlingame 1979, 278–279, 森 2009, 161 (6) を参照。その他, *Āṅuttara Nikāya Aṭṭhakathā*, 1. 433–435 に記される同様の内容に関しては, 森 2009, 162 (8) を参照。
- 7) 韻律は *Upajāti*。
- 8) 原文は *-abhirate* とあるが, ここでは *-abhirate* と理解して読んだ。蔵訳では *mngon* (P: *sngon*) *dgyes tshe* /。
- 9) 第 2 偈から第 64 偈までの韻律は *Anuṣṭubh*。
- 10) 原文は *yatkīrtir* であるが, ここでは *de Jong* に従って *yatkīrtim* と読んだ。
- 11) *スダナ* という固有名詞と音の連続が認められる。
- 12) 黄金のなる音か。『毘奈耶』(882a) には「金声」とあり, 「美しい声」と理解した。
- 13) 『毘奈耶』(882a) に, 「諸臣聞已, 知往善相, 歎未曾有。」とある。美しい声を聞いて, 王は彼が大金持ちと占い, それを聞いた臣下が王を讃嘆した。
- 14) ここでは *-ghr-* と *-dhana-* の, 音の連続が認められる。
- 15) 原文は *sabhā-maṇḍala-panḍitāḥ* であるが, *de Jong* に従って *sabhā-maṇḍana-panḍitāḥ* と読んだ。対応する蔵訳は *mdun sar mdzes pa'i mkhas pa min* / 「集会を飾る賢者ではない」。
- 16) 原文は *bhayaṃ-karaḥ* (恐ろしい) であるが, 蔵訳では *... 'jigs nyo* / 「恐怖を買う」と *nyo* 「買う」があるので, これを活かして読んだ。原文の *-karaḥ* (為す) は *krayaḥ* (買う) の可能性もあろう。
- 17) 原文は *darpoḡradurgrahagrāhadurgrahā* だが, *de Jong* は *darpoḡradurgrahā grāhadurgrahā* の読みではないかと提案する。またここでは *-gra-* という音の連続が認められる。
- 18) 原文は *-āśleṣaviṣeṣa-* であるが, 意味がとりにくい。ここでは *de Jong* に従って *-āśleṣaviṣeṣa-* と読んだ。
- 19) 原文は *avāra-vāraramaṇī-ramaṇīyā*。このうち *vāraramaṇī* を「大衆の女性」, つまり「売春婦」と理解した。いっぽう蔵訳では *mi bzlog smad 'tshong mdzes pa bzhin* (避けがたい美しい売春婦のようである) とある。これに従えば *-avāra-* は *-avārya-* と理解すべきであろう。
- 20) 『毘奈耶』(882a) に「王見驚嗟, 立為国相。」とある。
- 21) 『毘奈耶』(882a) に「悉(臣)皆見嫉。」とある。
- 22) 原文は *āghātaṃ prekṣitāḥ* であるが, 意味がとりにくい。ここでは *de Jong* に従って, *āghātaṃ preritāḥ* と読んだ。
- 23) 原文は *na śāsanam atanyata* (規則は実施されなかった) であるが, 構文的に不自然に思われる。ここではあえて *de Jong* の提案どおり, *na śāsanam amanyata* (規則を考えつかなかった) と読んだ。*amanyata* に対応する蔵訳は *ma mnos* (考えられない)。
- 24) 原文は *-arditam* であるが, 文法的には *de Jong* の提案する *-ardanam* の方がすっきりする。蔵訳は *nyams 'gyur ba* (損なわれる)。
- 25) 『毘奈耶』(882a) では, 嫉妬を覚えた大臣たちが王に彼が間違ったことをしている(妙音大臣多行欺誑。)と告げたところ, これを信じた王は彼を験そうとして(即便試験。), 百姓のところから意のままに税を徴収させた(令於百姓処, 随意徴取。), 彼は人数分だけとって(依数而取。)不正をまったく働かなかった(不枉一錢。是を知った王は稀有なことだと感じ入り, 彼をより高い位につけた(王勘知已, 深生稀有。重加其位。))とある。
- 26) *Apte* 1986 に従うと, *upadhā* (誘惑) には, *dharma*, *artha*, *kāma*, *bhaya* の 4 種があるとする。蔵訳は *chos kyis 'jigs shing cho 'brang gtsang* (ダルマを恐れながらも血統正しく(?) 清浄である) となる。*upadhā* に対応する蔵訳は *cho 'brang* (血統, 礼儀正しい) であるが, サンスクリットという意味もあらず, 意味が不明。
- 27) サンスクリットの *sattra* には「供養」のほかにも「小屋」という意味もある。ここでも「布施小屋」の可能性もあろう。*sattra* に対応する蔵訳は *sbyin khang*。袴谷 1996: 78 はこれを *shyin [sic] pa'i khang* としながらも, 「布施の家」(**dāna-kūta*) という訳語とサンスクリット原語を想定している。いっぽう, 『毘奈耶』(882a) では,

- 財や食は悉く無常だと知った善財は義堂を造らせて衣食を布施したとある（時妙音大臣，体知財食，皆悉無常。遂造義堂，給施衣食）。
- 28) 『毘奈耶』(882b)では、「是時南方，有五百隱逸遁俗之賓。故弊充衣，少欲為務。」とある。
- 29) 『毘奈耶』(882b)にも、「遠涉艱險，欲向橋閃毘国。」とある。
- 30) 『毘奈耶』(882b)では、「於其中路，無水可求。即便共詣，一大樹下。告言，可与我水。」とある。
- 31) ここでは木から出てきたのは彼（の樹神）と理解した。『毘奈耶』(882b)では、飾りのついた手が延びて、瓶から水を注いだ（時樹枝間，忽展一手。環釧莊嚴，持瓶注水。）とある。DhA (1. 203. l. 19–204. l. 2) では、ヒマラヤ山から帰る途中の苦行者たちが、ニャグローダの木根元に座った。そのうちの年老いた聖者が、この木には威力のある神が住んでいるに違いないと思い、水をくれたら好いなと思った途端、木の精が水を与えた、とある (Tesu jetṭhaka-tāpaso cintesi: ‘imasmim rukkhe addhivatthā devatā na oramattikā bhavissati, mahesakken’ ettha devarājena bhavittabam; sādhu vat’ assa sac’ āyam isigaṇassa pāṇiyam dadeyyā’ ti; so pāṇiyam adāsi.)。
- 32) 『毘奈耶』(882b)では、「彼五百人，皆飽足飲已。」とある。
- 33) 原文は prārthitaḥ であるが、意味がとりにくい。ここでは de Jong に従って、prasthitāḥ と読んだ。対応する蔵訳は chas te (出立して)。
- 34) 原文は udbhūtaṃ であるが、文法的にすっきりしない。ここでは de Jong に従って、udbhūtaḥ と読んだ。
- 35) 『毘奈耶』(882b)では、「問言，汝是何神。」とある。
- 36) 原文は āśayaḥ śriyaḥ であるが、意味がとりにくい。ここでは de Jong に従って、āśrayaḥ śriyaḥ と読んだ。対応する蔵訳は，snyan par grags pa dpal gyi gnas (誓あり，富ある)。
- 37) 『毘奈耶』(882b)には「為客縫衣人。」とある。
- 38) 原文はどちらも daksinaḥ であるが，ここでは意味を別にした。後者に対応する蔵訳では，rjes mthun (〜と同じ) とあり，意味が一致しない。
- 39) ここまでの対応する物語は『毘奈耶』(882b)にも認められるが，ここではサンスクリット原文の次の物語と一つにまとめられている。しかもサンスクリットの原文では，次の物語で「八支の布薩を破った」とあるものの，漢訳の『毘奈耶』(882b)では「復由受持，八支流戒故。」とあり，内容的に一致しない。
- 40) 原語 dronyām を「桶の中に」と訳した。蔵訳では mdzod (蔵，倉庫) となっている。
- 41) de Jong は，-pūjane の可能性を指摘する。対応する蔵訳は dge ’dun mchod la (サンガ供養の時)。
- 42) 原文 caturah paricaryāyām をこのように訳した。この箇所は北京とデルゲ双方の大蔵経に混乱がある。デルゲ版では，yongs su spyad pa bzhi yis ni の箇所は添え書きがあり，北京版とナルタン版 (ge 131b3) ではこの箇所が抜け落ちている。もしサンスクリット原文が catus-paricaryāyām であれば，蔵訳と一致する。つまり「4つの給仕」と考えて，そのうちの一つが酸乳の給仕とする解釈である。
- 43) 原文は gauravocāram であるが，意味がとりにくい。ここでは de Jong に従って gauravodāram と読んだ。
- 44) 八支の布薩 (atṭhaṅgiko-uposatha) については，雲井昭善『パーリ語辞典』「uposatha」の項目によると，これは Sutta-nipāta, 400–401 に説かれている。即ち，①生き物を殺してはならない。②与えられないものを取らない。③嘘を言ってはならない。④酒飲みであってはならない。⑤非梵行の性交を離れる。⑥花飾りをつけてはならない。⑦芳香を用いてはならない。⑧地上に敷いた床にのみ臥す。半月の第14日，第15日，第8日に布薩を修することが在家者の務めとされる。その他 Aṅguttara Nikāya, 4, 253–254 を参照。また，また，布薩のとき，在家の信者はこの八支の布薩 (八戒) を守り，説法を聞き，僧尼に飲食の供養をする。中村元『仏教語辞典』「布摩」の項目を参照。
- 45) どうして夜に食事をとると，布薩を全うしないことになるのか。八支の布薩 (八戒) は雲井昭善『パーリ語辞典』に従えば，Aṅguttara Nikāya, 4, 253–254 に，「殺生する勿れ，不与取をする勿れ，妄語をする勿れ，飲酒をする勿れ，非梵行の公会を離れるべし，夜食をすべきでない (rattim na bhuñjeyya)，非時食をするな，華鬘を持つな，香を持つな，小床，地上の敷具に臥せよ，これがけだし八分 (八支) の布薩という。」とある。このうちの「夜食をすべきではない。」に抵触することになるのではないか。
- 46) 『毘奈耶』(882b)には，「由持戒故，報得生天。我等亦応，詣給孤独長者处。受褒灑陀，八支淨戒。」とある。
- 47) サンスクリット原文ではたんに「家」とだけあるが，『毘奈耶』(882b)には，「妙音長者，所設義堂。」とある。注20を参照。
- 48) 『毘奈耶』(882b)では，スダナである妙音長者が三ヶ月間ここに滞在して，夏の終わりに一緒に行こうと提案する。「仁等可於此，住持三月夏終，我当共去。」DhA (1. 206, l. 23–207, l. 1) では，「聖なる方たち，4ヶ月間住

- むという約束をあなた方は私どもにしませんでしたか。」(Na nu bhante tumhehi cattāro vassike māse amhākaṃ gahitā va paṭiññā) とある。
- 49) 『毘奈耶』(882b)には「具陳其事。」とある。
- 50) 『毘奈耶』(882b)では、世尊は彼ら聖者と妙音長者の本性を見極められ、対機説法を行われた。前者は阿羅漢果を得、後者は預流果を得た「爾時世尊、觀彼根性。隨機説法、令出家已。斷諸煩惱、証阿羅漢果。妙音長者、得預流果。」とある。DhA (1. 207, ll. 12-15)では、「教えの後、彼らすべては神通力と共に阿羅漢となり出家を願う。」(desanā-pariyosāne sabbe pi saha paṭisambhidāhi arahattaṃ patvā pabbajjaṃ yācivā, 'etha bhikkhavo' ti vacanasamanantaram iddhimayapattacīvaradharā ehibhikkhū ahesuṃ.) とある。DhpA (208, ll. 3-5)では、ゴーシラ長者はゴーシラ園 (Ghositārāma) を、クックタ長者はクックタ園 (Kukkuṭārāma) を、パーヴァーリヤ長者はパーヴァーリヤカ園 (Pāvāriyakārāma) という3つの大精舎をそれぞれ建立させ、仏陀において願うメッセージを送った、とある。
- 51) 『毘奈耶』(882b)に、「既見諦已、頂礼仏足。」とある。
- 52) 『毘奈耶』(882b)では、妙音長者が世尊に僧院を建てるのでそれを受納して欲しいとお願いする。「世尊唯願哀愍、往橋閃毘。我当為仏、及諸聖衆、造毘訶羅。世尊默然、慈悲受請。」
- 53) 『毘奈耶』(882b)に、「即告大准陀曰。汝今可共、妙音長者、往橋閃毘、造毘訶羅。時大准陀、受仏教已。執持衣鉢、共妙音俱、行至橋閃毘。造一住処、修宮既了。」とある。
- 54) 原文の so 'bhūc cundavīhārahbhūh はいまひとつ文法的にしっくりとこない。
- 55) 袴谷1996, 78は、ゴーシラは自分の僧院が十分に管理されていないことを知り、帰宅後、信仰の篤い下女ラダー (Tib: mGu byed) を業務執行職に任命し (Tib: las su bskos te)、彼女の献身的な奉仕によって僧院は再び僧院としての盛況をみることになる、という物語を提供する。
- 56) 同じく袴谷1996, 78によれば、ゴーシラが信仰心の篤い下女ラダーを、彼が寄贈した僧院の「業務執行職に」任命し、彼女の献身的な奉仕によって僧院は再び僧院としての盛況を見ることになる。この物語は『毘奈耶』にはなく、代わりにこの僧院を訪れ、供養を受けた仏陀が7種の有事福業と無事福業を説法される話を出す (882c-883a)。
- 57) 原文は adāsī syām iti であるが、de Jong は na dāsī syām iti と訂正する。蔵訳では北京版とデルゲ版のいずれも、/ de yis 'bangs mor bdag gyur ces / 「私は使用人になります、と行って」とあり、否定辞を含まない。デルゲ版のサンスクリット音写は、tā dāsī syām iti とあるので、蔵訳はこれに対応している。
- 58) 『毘奈耶』(883c)に「有一長者。名曰善合、『賢愚経』(386c)に「有一長者、名散陀寧。」とある。Divya 462, l. 11では、Samdhāna。
- 59) 『毘奈耶』(883c)に「婆羅痾斯城、『賢愚経』(386c)に「名波羅奈。」とある。
- 60) 『毘奈耶』(883c)に「於十二年中、天旱無雨。」とある。『賢愚経』(386c)では、火星が出現し、そのため旱魃が起こったとある「有火星現。是其惡災。此星已現、十二年中、国当乾旱、無有天雨。」とある。
- 61) 原文 avāritamabhūcchatram を avāritam abhūt sattram と訂正して訳した。蔵訳では、sbyin khang mi zlog (妨げられることのない布施の供養) と訳出している。「布施の供養」については注27を参照。『賢愚経』(386c)には「恒設供具、給諸道士。」とある。Divya 462, ll. 16-17では、dānaśālā māpītāḥ (布施小屋が作られた) とある。
- 62) 原文は koṣṭhārapatir ... saḥāyasthā hi samṛddhayaḥ とあるが、ここでは de Jong にしたがって koṣṭhārapatir ... saḥāyasthā hi siddhayaḥ と読んだ。第63偈には koṣṭhiko とある。Divya 462, l. 13では、koṣṭhāgarika とある。『毘奈耶』(883c)には「掌庫者」とあり、『賢愚経』(386c)には「蔵監」とある。この箇所に対して、袴谷1996, 77は、koṣṭhāgarika を「世話人」と訳し、「案内人」(āvāhana, āhvāna, āhvāyaka) とともに、教団内部もしくは周辺にあって、差別的な役割分担のもとに、教団への奉仕に当たっていた人々として注目されると述べている。
- 63) 『毘奈耶』(883c)では、「管食人」という職掌を出し固有名詞を記さない「於日月中、以上妙飲食供養、一千独覺聖者、其管食人、每旦将一狗、往白時至。」。『賢愚経』(386c)は、単に使用人とのみある「恒令一人、知白時到。時此使人、養一狗子。」。
- 64) 山口2015, 12は Dhammapadaṭṭhakathā に収められているウデーナ物語を翻訳する際、pahitasaññānenāgaccheyyathā 'ti を、「遣わされたことを合図に、[うちに]いらしてください。」とパーリ語の saññā を「合図」と訳している。対応する蔵訳は、brda ni rig byed pa。
- 65) 『毘奈耶』(883c)では、善合長者=我(仏陀)、掌庫人=給孤独、白時至者=烏陀演那王、狗=妙音。『賢愚経』(387a)では、大富散檀寧=我身、蔵臣(監)=須達、日日往白時到人=優填王、狗子=美音長者。

- 66) 『毘奈耶』(883c)では、「由彼往声白聖者故，今得好音。」とあり、『賢愚經』(387a)でも、「由其吠故，世世好音。」とあり，狗が吠えた功德により，今この「好音」を得たとする。こちらの方がしっくりとする。
- 67) 原文は *sumanasā* であるが意味が取りにくい。ここでは de Jong にしたがって *sumanasām* (良き人たちの) に改めて読んだ。対応する蔵訳は，*yid ni legs pa mams* (心清い者たち)。
- 68) 原文の *śraṇaṅjalibhiḥ* は不明。*śraṇa* は比丘の意味がある。対応する蔵訳は，*gsan pa'i snyim pa*。
- 69) 韻律は *Drutavilambhita*。
- 70) ナンバリングは，王 (2010) に従う。「15」となるのは，本尊タンカを「1」とするためで，本尊タンカの右14幅目に表わされることは，他のセットと同様である。

参考文献

- Forty-one Thang-kas from the Collection of His Holiness the Dalai Lama: Past Lives of the Buddha*. 1980. Paris: Editions Sciaky.
- Padma-chos-'phel, Deborah L. Black, and Kṣemendra. 1997. *Leaves of the Heaven Tree: The Great Compassion of Buddha*. Berkley: Dharma Pub.
- Rani, Sharada. 2005. *Buddhist Tales of Kashmir in Tibetan Woodcuts: Narthang Series of the Woodcuts of Kṣemendra's Avadāna-kalpalatā*. New Delhi: Interntaional Academy of Indian Culture.
- Rhie, Malylin M. and Thurman, Robert A. F. 1999. *Worlds of Transformation: Tibetan Art of Wisdom and Compassion*. Harry N. Abrams [distributor].
- rTogs brjod dpag bsam 'khri shing gi snyan tshig gi rgyan lhug par bkrol pa mthong ba don ldan*. 1981. Delhi: Karmapae Chodhey.
- Tucci, Giuseppe. 1999. *Tibetan Painted Scrolls*. Bangkok: SDI Publications.
- Wan, Jiapeng, ed. 2003. *The Complete Collection of Treasures of the Palace Museum: Tangka-Buddhist Painting of Tibet*. Hong Kong: Commercial Press.
- 王家鵬 (主編) 2010. 『故宮唐卡図典』故宮博物院 北京, 故宮出版社

図版出典

- 図1 筆者 (大羽) の現地調査で撮影した画像を資料として画像処理して作成
- 図2 雍和宮提供
- 図3 (王家鵬2010) 図版番号71
- 図4 (Forty-one Thang-kas 1980) 通し番号14
- 図5 (Wan 2003) No. 12
- 図6 Tibet House New Delhi 提供
- 図7 (Rhie and Thurman 1999) 148頁
- 図8 (Forty-one Thangkas 1980) 通し番号14 部分 (下部)
- 図9 筆者 (大羽) の現地調査で撮影した画像を資料として画像処理して作成
- 図10 (Rhie and Thurman 1999) 148頁 部分 (中央部)

本研究は JSPS 科研費基盤研究 (C) 『『アヴァダーナ・カルバラター』を中心とした仏教信仰の諸相』(平成26-28年度, 課題番号: 26370058, 代表: 引田弘道) の成果の一部です。